

- 対象地域
広島県山県郡北広島町
(西中国山地国定公園)
- 設立日: H16.11.7
- 構成員数: 32人
- 全体構想作成日: H18.3.31
- 実施計画作成日: H18.10.30
(H28.5現在)

やわたしつげんしぜんさいせいきょうぎかい

八幡湿原自然再生協議会

再生 目標

「命の環 つなげる」をキャッチフレーズに、牧草地造成前の昭和30年代前半頃の湿原生態系を再生する。

本地域は、広島県の北西部に位置し、1,000m級の山に囲まれた標高800mの盆地です。また、ヌマガヤーマザミ群集に代表される中間湿原が点在し、自生のものとしては貴重なカキツバタが生育しています。

しかし、牧場化に伴う排水施設や道路の整備が原因と思われる湿原の乾燥化により、周辺部からアカマツやイヌツゲ等の木本類が侵入し、希少種の生育環境が悪化しています。このため、自然生態系の保全・再生のための計画を作成、湿原環境の再生に向けた取り組みを進めています。



【事務局】

730-8511
広島市中区基町10-52
広島県自然環境課
野生生物グループ内
電話: 082-513-2933

活動報告

霧ヶ谷湿原の鳥類

【報告者】認定NPO法人西中国山地自然史研究会 上野 吉雄

霧ヶ谷は1964年から1986年にかけて牧場として利用され、そのほとんどはカモガヤなどの牧野植生でした。そこでは草原性鳥類として代表的なオオジギやホオアカが見られました。

その後、牧場は閉鎖し放置され、1991年から1993年の3年で行われた芸北町自然学術調査の時の霧ヶ谷は、丈の低いノイバラの群落の中に所々カラコギカエデがあるような植生でした。そこでは丈の低い草原に生息するモズやキジが繁殖していました。現在では、ハルガヤ、キンミズヒキ、ヨモギなどからなる草本群落やノイバラ、カンボク、カラコギカエデ、ハンノキなどが群生する湿原へと再生しています。



11月に開催されたNPO法人主催の野鳥観察会
西中国山地自然史研究会では、自然再生地(霧ヶ谷湿原)で色々な自然観察会を開催しています。

認定NPO法人西中国山地自然史研究会は自然再生にあたり霧ヶ谷の工事前の鳥類相を把握しておく必要があると考え、2005年から鳥類調査を始めました。

その過程でミヤマホオジロを繁殖期に確認しました。ミヤマホオジロはウスリー川流域、中国東北部、朝鮮半島などで繁殖し、主として西南日本に渡来し、越冬する冬鳥ですが、1967年に長崎県の対馬で巣立ち直後の幼鳥が確認されました。

その後、1993年に広島県の臥竜山で本州で始めて繁殖が確認されました。

そこで、霧ヶ谷の再生事業では、県内では希少なミヤマホオジロが繁殖地として選択している、氾濫源に発達したハンノキを含むカンボク群落には手をつけずに残してもらうことになりました。

この例から、自然再生事業における生物相調査がいかに大切かを実感しました。今後も、ミヤマホオジロの生息環境が広がる事を期待して維持管理やモニタリングを続けていきたいと思えます。



オンドリ



ノスリ

工事の終わった2008年の夏には、新たに作られた池にカワセミがやってきて餌を採る姿が見られるようになりました。これは、新たに作られた池や導水路にヤマアカガエルがやってきて産卵し、沢山のオタマジャクシが発生し、それを目当てにカワセミがやってくるようになったようです。カワセミは再生工事が施工される前は霧ヶ谷では確認されていませんでした。また、2009年2月には池の周辺にオンドリの足跡がしっかり残されており、オンドリが霧ヶ谷の池をねぐらとして利用していることがわかりました。

自然再生地(霧ヶ谷湿原)で観察される鳥類



キレンジャク

さらに、3月に、霧ヶ谷でアオシギが確認されました。アオシギは、モンゴルやウスリー地方で繁殖し、日本には数少ない冬鳥として渡来し越冬しますが、単独で、山間部の溪流や水田にすみ、ミズなどを餌としています。これまで、北広島町内では数カ所ですら確認されていませんでした。以上のように、霧ヶ谷が水辺性鳥類の生息地として確実に機能している様子が見えてきています。秋には認定NPO法人西中国山地自然史研究会により、霧ヶ谷をフィールドとした観察会も行われており、ベニマシコやカシラダカ、アトリ、ツグミなどの冬鳥を観察することができます。